

令和5年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

| 重点目標   | 具体的取組  | 主担当                                  | 実現状況の達成度判断基準   | 最終評価  | 分析（成果と課題）及び次年度の対応   |
|--|--|--------------------------------------|--|---|---|
| <p>1 学びのある学校</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習習慣の確立に向けた指導や学力層・個に応じた学習指導により、上級学校進学のための学力を保障をする。</li> <li>・授業において、ICTの効果的な活用や主体的、対話的で深い学びの視点からの授業改善に努め、思考力・表現力やコミュニケーション能力の伸長を図る。また、課題を発見し、主体的・協働的に考え、課題を解決することができる探究力を育成する。</li> <li>・相互授業参観や研究授業の実施、各種研究会への参加など、研修・研究に積極的に取り組み、教職員の授業力の向上を目指す。</li> </ul> | <p>① 予習を中心とする主体的な学びのサイクルを身につけさせるとともに、基礎力の定着及び応用力・活用力等の育成を図る。</p>   | <p>教務課<br/>各教科<br/>各学年</p>           | <p>予習を重視することにより、主体的に深く考えて学習する習慣が身につけていると自己評価する生徒の割合が全体の</p> <p>A 90%以上である<br/>B 85%以上である<br/>C 80%以上である<br/>D 80%未満である</p>                 | <p>後期学校評価結果<br/>予習を重視し、主体的に深く考えて学習する姿勢が身につけている生徒の割合が</p> <p>88% (B)</p>                               | <p>昨年度(R4)後期と比べて1ポイント減の88%という結果であったが、主体的に深く考えて学習する習慣が着実に定着していると考えられる。<br/>また、これまでの教員の努力による要素も大きいと考えられる。</p>   |
|  | <p>② オンラインでの学習環境を有効に活用し、「探究力」育成に重点をおいた授業を展開する。</p>   | <p>SSH<br/>各教科<br/>各学年<br/>教務課</p>   | <p>授業において、「探究力」を身につけるためにオンライン学習を有効に活用することができたと考える生徒の割合が</p> <p>A 80%以上である<br/>B 70%以上である<br/>C 60%以上である<br/>D 60%未満である</p>                 | <p>オンライン学習を有効に活用することができたと考える生徒の割合が</p> <p>55% (D)</p>   | <p>年度当初はオンライン学習取組率が90%であったが、時間がたつにつれ取組率が低下し、年間の取組率と効果的に活用できたと回答した生徒の割合がほぼ同じであった。このことから、オンライン学習は「探究力」を育成するための授業の展開においては効果的であるということがわかったが、取組率の上昇が課題であることが課題であることもわかった。よって、次年度は生徒に対してオンライン学習の意図について十分な説明を行い、取組率の上昇につなげたい。</p>                                |
|  | <p>③ 生徒の具体的活動を評価するパフォーマンス評価をさらに充実させ、学校設定科目や課題研究における探究活動でルーブリックを作成し、それをを用いた評価を行う。生徒が自身のフィードバックに有効に活用できるように改善する。</p> | <p>SSH<br/>進路指導課<br/>各教科<br/>各学年</p> | <p>「課題研究発表会」において、ルーブリックが自身のフィードバックに「有効に活用された」（「有効だった」の回答のみ）と考える生徒の割合が</p> <p>A 70%以上である<br/>B 60%以上である<br/>C 50%以上である<br/>D 50%未満である</p>   | <p>「有効に活用された」（「有効だった」の回答のみ）と考える生徒の割合が</p> <p>42% (D)</p>  | <p>肯定的な回答をした生徒は全体で84%であったが、「有効だった」と回答した生徒は42%となり、自分たちの発表において必要なものを知るきっかけにしたり、自身の研究を客観的に見る指標としたりすることができていた。今後は、ルーブリックの評価内容を生かせるよう、具体的な活用方法を生徒へ提示する。</p>  |
|  | <p>④ 課題研究を通じて、生徒に主体的・協働的に課題を解決することができる探究力をつけさせる。</p>   | <p>SSH<br/>進路指導課<br/>各教科<br/>各学年</p> | <p>2年生、3年生の文系において、課題研究を通して探究力がついたと考える生徒が</p> <p>A 90%以上である<br/>B 80%以上である<br/>C 70%以上である<br/>D 70%未満である</p>                                | <p>「とてもそう思う」（の回答のみ）と考える生徒の割合が</p> <p>72% (C)</p>  | <p>肯定的な回答（とてもそう思う＋そう思う）をした生徒は100%であったが、「とてもそう思う」と回答した生徒が72%であった。昨年度から数値を下げたが、探究力を課題を設定する力、情報を収集する力、整理・分析する力とし、自己分析させた結果、人文学グループでは情報を収集・整理・分析すること、社会学グループでは課題を設定することが課題にあげる傾向が見られた。この結果を踏まえ、次年度は領域別に研究のアプローチを考えていきたい。</p>                                  |
|  | <p>⑤ 研究授業等を通して、教員自らが教科指導力を高め、授業の質的向上を図る。</p>   | <p>教務課<br/>各教科</p>                   | <p>アクティブ・ラーニングの手法を取り入れたり、ICT機器の活用を工夫することで、自らの授業を改善することができたと自己評価する教員の割合が</p> <p>A 85%以上である<br/>B 75%以上である<br/>C 65%以上である<br/>D 65%未満である</p> | <p>後期学校評価結果<br/>私はICTの活用を工夫することで授業改善につなげた<br/>81% (B)<br/>私はアクティブラーニングの手法を積極的に取り入れている<br/>88% (A)</p> | <p>R2年度から行っている調査であるが、ICT利用に関しては81%の教員が授業改善につなげていると回答している。昨年度(R4)と比較して2ポイントの減であったが、ICT利用が着実に定着していると考えられる。<br/>また、アクティブラーニングに関しては昨年度(R4)より10ポイント増加して88%の教員が取り入れていると回答している。かなりの増加であるが、一人一台端末等のICT機器(ChromeBook)を活用してのアクティブラーニングまで応用できているかについてはまだこれからである。</p> |
| <p>学校関係者評価委員会の評価</p>   |  |                                      | <p>新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、SSH、NSHの事業がコロナ以前に戻り、活発化していることを評価している。今後、今以上の成果を期待している。</p>   |   |   |
| <p>上記の評価結果を踏まえた今後の改善策</p>  |  |                                      | <p>SSH、NSHの事業を活用するとともに、ICT機器の更なる効果的な手法の開発を検討していきたい。</p>  |   |   |

令和5年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

| 重点目標  | 具体的取組 | 担当                         | 実現状況の達成度判断基準   | 最終評価  | 分析（成果と課題）及び次年度の対応  |
|---|-------|----------------------------|--|---|--|
| <p>2 個性が輝く学校</p> <p>・学習指導と進路指導の連携が取れ、3年間を見通した指導体制のもと、生徒に高い志を持たせ、一人一人の進路実現を図る。その際、低学年からのキャリア教育を充実させ、学ぶ意欲や進路意識の高揚を図る。</p> <p>・「文武両道」「自主自律」の精神のもと、学習活動のみならず部活動や学校行事、生徒会活動の充実を図り、レジリエンスの涵養と豊かな人間性と社会性を育む。</p> | ①     | 進路指導課<br>教務課<br>各学年<br>SSH | <p>離関10大学と国公立大学医学科の志望者数の合計が</p> <p>A 180人以上である<br/>B 150人以上である<br/>C 120人以上である<br/>D 120人未満である</p> <p>離関10大学と国公立大学医学科の合格者数の合計（現役生と過年度生の合計）が</p> <p>A 70人以上である<br/>B 60人以上である<br/>C 50人以上である<br/>D 50人未満である</p> | <p>9月3年進路志望調査結果</p> <p>138名（C）</p> <p>離関10大学合格者が47名（現役35名）国公立大学医学部医学科合格者が3名（現役2名）</p> <p>50名（C）</p> | <p>離関10大学志望者が131名、医学部医学科志望者が7名であった。離関10大学志望者が4月に比べ若干減少し、金沢大が増加している。昨年度に比べ、離関志望数が大きく減少している。志望している生徒が結果を出せるような指導を、学年団とともに行っていきたい。</p> <p>離関大志望者が例年と比べて少ない学年であるが、第一志望の大学に最後まで果敢に挑戦した生徒が多かった。北海道・東北・東京は過去5年で合格者が最小であるが、京都・神戸・九州は例年並み、大阪は昨年から倍増、名古屋や過去5年で最も合格者が多かった。1年次から高い志望を持つきっかけとなるしかけである「大学見学会」や「進路講演会」を充実させ、教員の教科指導力や進路指導力の向上のプログラムの開発を進める。</p> |
|   | ②     | 生徒指導課                      | <p>生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であるとする保護者の割合が</p> <p>A 95%以上である<br/>B 90%以上である<br/>C 80%以上である<br/>D 80%未満である</p>  | <p>後期学校評価結果</p> <p>生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であるとする保護者の割合が</p> <p>95%（A）</p>                                | <p>前期から1ポイント、昨年度（R4）後期から2ポイント上昇し、A評価となった。身だしなみや挨拶、その他規範意識等について、自分事として捉え、自分で考えて行動できるよう、引き続き指導に努めていきたい。</p>  |
|   | ③     | 生徒指導課<br>教育相談室<br>各学年      | <p>みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が</p> <p>A 95%以上である<br/>B 90%以上である<br/>C 80%以上である<br/>D 80%未満である</p>   | <p>後期学校評価結果</p> <p>みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が</p> <p>97%（A）</p>                                       | <p>前期から1ポイント、昨年度（R4）後期から1ポイント上昇し、昨年度に引き続きA評価であった。生徒が安心安全に、また充実した学校生活を遅れるよう、日々注意深く観察し、いじめの兆候を見逃さず、教職員や保護者、関係機関と連携して組織的な対応を心掛けていきたい。</p>   |
|   | ④     | 生徒会課<br>部同好会顧問             | <p>部活動が人間力の向上(学業との両立、挨拶など)につながったと考える生徒の割合が</p> <p>A 60%以上である<br/>B 50%以上である<br/>C 40%以上である<br/>D 40%未満である</p>  | <p>後期学校評価結果</p> <p>部活動が人間力の向上(学業との両立、挨拶など)につながったと考える生徒の割合が</p> <p>65%（A）</p>                        | <p>昨年より10%増加している。職員のアナケートからも好感触が10%程度の上昇している（約8割が肯定的）。部活動を頑張っている生徒が多いが、昨年度同様2年後期に部活動をやめる生徒が散見される。成功だけではなく成長を意識した指導と、成長を通じての自己肯定感、自己有用感が向上していくよう指導したい。</p>  |
|   | ⑤     | 保健環境課                      | <p>環境美化意識を持って行動している生徒の割合が、</p> <p>A 95%以上である<br/>B 90%以上である<br/>C 85%以上である<br/>D 85%未満である</p>  | <p>後期学校評価結果</p> <p>環境美化意識を持って行動している生徒の割合が</p> <p>93%（B）</p>   | <p>評価結果は昨年度と同様の93%であった。2学期の環境美化週間のクラス点検の結果は合格クラスが58.3%（14クラス）、その後の抜き打ち点検では79.2%（19クラス）と向上した。環境美化委員会を中心に生徒の環境美化意識は高く、今後も引き続き継続できる様にしたい。日頃、学校生活を送る自分たちの生活空間の美化について考えさせ、より多くの生徒が行動できるように図りたい。</p>   |

令和5年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

| 重点目標               | 具体的取組  | 担当  | 実現状況の達成度判断基準  | 最終評価                                    | 分析（成果と課題）及び次年度の対応  |
|--------------------|--|---|---|---|--|
| 2                  | ⑥ 教科・学年および図書委員会と連携し、生徒の図書室利用を促進するとともに読書活動を推進する。また、読書への関心を高め、知的好奇心の喚起に努めることで、不読率を低下させる。 | 図書室<br>各教科<br>各学年   | 年2回（春・秋）不読率の平均が<br>A 50%未満である<br>B 60%未満である<br>C 70%未満である<br>D 70%以上である             | アンケート結果<br>（3回実施）<br><br>56%（B）         | 昨年度の62%に比べ、改善が見られるものの、約半数の生徒が本を読まないこと、学年進行やアンケートを重ねるにつれ、不読率が上がっていることなど、読書離れが加速している感は否めない。生徒にとって、スマートフォンなどのツールが非常に身近なものとなっている中、さまざまな機会を捉えて情報を発信し、生徒の読書意欲を喚起できるよう図っていきたい。  |
|                    | ⑦ 体育の授業を通じて、体力向上の大切さを理解させ、筋力・走力と、体力の源である持久力アップのための取組を行う。                               | 保健体育科<br>各学年  | 走力（持久力）の記録が、春より秋に向上した生徒の割合が<br>A 80%以上である<br>B 70%以上である<br>C 60%以上である<br>D 60%未満である | 持久走の記録を春と秋で比較し、向上した生徒の割合が<br><br>70%（B） | 全体では、70%の生徒の記録が向上した。学年で見ると1年生は84%、2年生は79%の向上となった。両学年ともに多くの生徒が記録を向上させた。逆に3年男子が非常に低かった。例年3年生は部活動を終了するため数値が低くなるのだが、今年は特に3年男子が33%向上であり、低数値が顕著であった。「文武両道」を校是としているが、最近「文」が重視され「武」の気質を育成しきれていない雰囲気がある。精神的な力が必要である持久力の取り組みが長年本校の強みであった。心身両面の体力を育成していくためにも、今後は体育の授業はもちろんだが、学校行事、部活動等を含め学校全体で育んでいく必要性を感じる。 |
| 学校関係者評価委員会の評価      |  | 学校の取り組みに対して保護者は評価しているが、教職員の評価が低いので、取り組み内容の精査を図っていただきたい。     |   |   |  |
| 上記の評価結果を踏まえた今後の改善策 |  | 学習活動のみならず部活動や学校行事、生徒会活動のみならず、LHや総合的な探究の時間を通して、重点目標の達成を図りたい。 |   |   |  |

|                    |   |   |                |   |   |  |
|--------------------|---|---|----------------|---|---|--|
| 3                  | 地域から信頼される学校<br><br>・学校公開やホームページ等を通じて本校の教育活動を積極的に情報発信し、「保護者や地域から信頼される学校づくり」、「開かれた学校づくり」を推進する。<br><br>・地域でのボランティア活動を推進するとともに、異校種間の連携を密にし、南加賀地区の基幹校としての自覚ある学校運営に努める。 | ① 主な学校行事や特色ある教育活動等について、生徒・保護者・地域から求められる情報を、ホームページやPTA活動等を通じて発信する。 | 総務課<br>教務課     | 学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が<br>A 95%以上である<br>B 90%以上である<br>C 85%以上である<br>D 85%未満である | 後期学校評価結果<br>学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が<br><br>95%（A） | 95%で、昨年度比プラス1%。プラスになった理由はコロナ禍ではPTA活動に制限がかかっていたが、今年度はコロナ5類移行に伴い、手指消毒やマスク着用も各自の判断に任せるなど大きな制限はなくなった。そのため、PTA関連行事は概ね予定通り行うことができた。また学校からの様々な情報をこまめにメール配信・ホームページにアップすることでより早く保護者に情報が届くようになったことが高評価につながったと考える。次年度はメール配信登録が、早い段階で100%になるように、段取りしていきたい。 |
|                    |   | ② 部・同好会活動が、各々の特性や得意な分野を活かすなど、地域等のボランティア活動に年間最低1回は参加する。            | 生徒会課<br>部同好会顧問 | ボランティア活動に参加した部・同好会活動の数が全体の<br>A 90%以上である<br>B 80%以上である<br>C 70%以上である<br>D 70%未満である          | ボランティア活動に参加した部・同好会活動の割合<br><br>94%（A）                         | ほとんどの部・同好会が11月から1月を中心に、校地内外でさまざまなボランティア活動を実施した。校地内での清掃活動が多いので、学務員と協力して、効率よく活動を心掛けたい。また、外部からのボランティア案内を周知し、個人の活動としてボランティアへの参加などを促したい。  |
| 学校関係者評価委員会の評価      |   | 保護者の中には、学校の取り組み内容を知らない方が多いので、広報活動にさらに取り組んでほしい。                    |                |   |   |  |
| 上記の評価結果を踏まえた今後の改善策 |   | 保護者の理解を得るために、ホームページの掲載やメール配信等で情報発信に努めたい。                          |                |   |   |  |

令和5年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

| 重点目標  | 具体的取組                                     | 主担当   | 実現状況の達成度判断基準   | 最終評価  | 分析（成果と課題）及び次年度の対応  |
|---|---|---|--|---|--|
| 4 教職員の働き方改善<br><br>・各自がワークライフバランスやタイムマネジメントを意識して業務や部活動の効率化を進め、時間外勤務時間の縮減に努める。 | ① 教育的効果を考慮しつつ、行事・業務の整理を行うとともに、業務の平準化を進める。 | 副校長   | 行事・業務の整理・統合・精選により、校務の効率化が図られたと考える教職員の割合が<br>A 70%以上である<br>B 60%以上である<br>C 50%以上である<br>D 50%未満である | 後期学校評価結果<br><br>行事・業務の整理・統合・精選により、校務の効率化が図られたと考える教職員の割合が<br><br>58% (C) | 昨年より4%、前期より2%上がったものの評価はCとなった。一因として昨年導入された観点別評価が2学年にわたること、ICTや採点業務省力化ソフトの導入に慣れてはきたがまだ定着していないこと等が考えられ、更なる効率化が行えるよう啓発していきたい。  |
|   | ② 月2回の定時退校日、部活動の休養日等を設定し、さらに業務遂行の効率化を進める。 | 教頭  | 時間外勤務が80時間を超える教職員の割合が<br>A 5%未満である<br>B 10%未満である<br>C 15%未満である<br>D 15%以上である                     | 教職員勤務時間調査結果<br><br>時間外勤務が80時間を超える教職員の割合が<br><br>8% (B)                  | 職員の1人当たりの時間外勤務時間は昨年度と比べると6%程度減少している。その一方、80時間を超える教職員の割合は昨年度の9%程度から今年度は8%程度であり、わずかな減少に留まった。したがって、全体としては時間外勤務時間の縮減は進んでいるが、特定の教員の過重な業務負担については課題が残っている。今後とも、校務のさらなる効率化、平準化を図りたい。 |
| 学校関係者評価委員会の評価   |   | 効果的な行事の精選や改善を行っていただきたい。                           |  |   |  |
| 上記の評価結果を踏まえた今後の改善策  |   | 土ゼミ等の活動において効果を持続しつつ、行事の内容の整理・統合・精選に引き続き取り組んでいきたい。 |  |   |  |